

おまけコラム…麻雀漫画誌のいろいろ

本コラムでは、今まで日本に存在した麻雀漫画雑誌を紹介します。20ページからの「麻雀漫画小史」とあわせてご覧ください。

漫画ギャンブルパンチ(竹書房 76年1月〜81年6月)

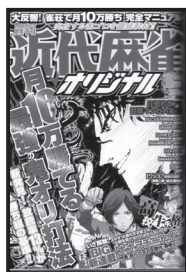


↑これは増刊号です

記念すべき日本初の麻雀漫画雑誌。当初は月刊でしたが、途中で月2回刊になってた模様。「ギャンブル」と言っているものの基本的に麻雀漫画がメインで、1号につき1本ほど競馬漫画など非麻雀漫画が載っている感じです。途中、なぜか半村良の傑作伝奇SF「石の血脈」を佐藤まさあきがコミカライズしたりもしました(誌面でえらく浮いている)。

近代麻雀オリジナル(竹書房 77年〜)

創刊当初は「傑作劇画 近代麻雀臨時増刊」。81年1月に現誌名へ変更。今でこそ近代麻雀の二軍的存在ですが、実は歴史はこちらのほうが古く、「ノーマーク爆牌党」、「はっばうやぶれ」、「根こそぎフラ



ンケン」など、数々の傑作を産み出してきました。00年2月、近麻本誌の月2回刊化にあわせて連載の一部がそちらへ移籍してから急速に衰退し、一時は版型が変わって再録漫画ばかりになったりして本気で休刊が危ぶまれました。

ガッツ麻雀(徳間書店 77年10月〜91年5月)



近麻系以外ではもっとも長く続いているにもかかわらず全貌がつかめない、異端の麻雀漫画雑誌。77年の創刊時は誌名が「ビッグハスラー」でしたが、その後3年の間に「劇画ザ・タウン」、「劇画タウン」、「漫画タウン」と目まぐるしく誌名を変え、また途中で月刊から月2回刊へと変化したようです(ただ

し、このあたりは筆者も「ギャンブル劇画」に掲載されている広告でしか見ておらず、詳細は不明)。そして、80年3月に月刊へと戻して再スタート(この号は現物確認)。その後、もともと雑誌のキヤッチフレーズだった「ガッツ麻雀」という文字が「漫画タウン」という誌名ロゴより大きくなっていき、88年7月には正式に「ガッツ麻雀」へ誌名変更。91年6月に「ガッツコミック」へ誌名変更し、一般漫画雑誌となりました(その後「なんでもあり」に誌名変更し、94年まで存続)。作品としては、「風の雀吾」「麻雀鳳凰城」(共に志村裕次+みやぞえ郁雄)、「無法者」など、他ではなかなかお目にかかれない傑作が多いです。ただ、80年代前半の作品はグリーンアロー出版から単行本になっているものが多くあるものの、後半は単行本になっていない作品がほとんど(いくたまき「セイガク雀キホーテ」が「パイが好き!!」のタイトルでアニメーションコミックスから出ているくらいか)なのがどうにも……。

ギャンブル劇画(徳間書店 77年11月〜79年9月)



↑これは増刊号です

ギャンパンと同様、「ギャンブル」と言いながら

もほぼすべてが麻雀（ゴルフ漫画なども載っていました）。見るべきところは少ないですが、国友やすゆきが描いているとかは資料的価値はありましようか。

劇画オール麻雀（壹番館書房 78年1月〜87年7月）



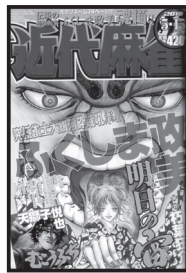
創刊当初は「劇画オールギャンブル」。81年7月に改称。また、途中で版元が廣済堂から子会社の壹番館へと変わっています。かなり長く続いています。あまり印象に残らない雑誌。麻雀漫画界三大四郎（残り二つは「麻雀三四郎」（松村一世十くずはら和彦）と「雀鬼三四郎」（吉田幸彦+みやぞえ郁雄）の一つである「黒棒三四郎」（吉田幸彦+みやぞえ郁雄）や、麻雀打ちとしてのムツゴロウさんの活躍（対局前に友ヒゲマの「ドンマイ」と叫ばれてたらうっかりアバラを折られて大ピンチ、とか本面白いですね！）を描く「雀魔王ムツゴロウ」（高本公夫+ももなり高）などが代表作。

傑作麻雀劇画（実業之日本社 78年3月〜88年10月）
もともと「週刊漫画サンデー」の増刊として単発で出ていたものが、78年3月から毎月出るようになる



り、79年5月に独立創刊。代表作に「海雀王」など。親雑誌であるマンサンにならって巻頭にヌードグラビア（うれしくない）が毎月ついていたりしたので、一見オヤジくさいんですが、後期になると巻末に同人麻雀漫画紹介コーナー（存外に面白い。「超時空西家オーラス」とか、読んでみたいもの多し）があったりと、実はかなり若者向け。

近代麻雀（竹書房 79年1月〜）



言わずと知れた麻雀漫画専門誌。当初は「麻雀劇画」という名で出ていたようですが（筆者現物未確認）、80年3月に「別冊近代麻雀」、97年5月に「近代麻雀」へと改称。00年2月より月2回刊化。名称が同じで紛らわしいのですが、活字誌の「近代麻雀」（73年1月〜87年12月）および「別冊近代麻雀」（75年5月〜77年2月（75年11月より「麻雀研究」ジャ

ンケン」に改称）、04年4月〜9月の二種類あり）とは別物です。代表作は「哭きの竜」「あぶれもん」「アカギ」（福本伸行）など多数。

特選麻雀（芳文社 80年10月〜89年11月）



全体的に垢抜けないというか、当時としてもダサイ雰囲気なんです。質自体は決して低くないです。休刊直前とかはあまりのダサさに瘴気さえ感じさせますけど。代表作に「雀鬼がゆく」（荒正義+司敬）など。

北野英明マガジン（竹書房 81年7月〜82年8月）



北野英明に関しては「麻雀漫画小史」も参照。雑誌ができるほどの人気だったことに驚きます。雑誌コード上は「ギャンブルパンチ」の名称変更ですが、内容につながりはなかった模様。筆者も「創刊準備

号」となっている81年7月号しか見たことがないため、それ以降の号の詳細は不明です。

劇画Aクラス麻雀(双葉社 82年8月〜90年6月)



誌名は阿佐田哲也の有名な戦術書「Aクラス麻雀」に由来。「漫画アクシヨン」の双葉社だけあって、モンキー・パンチが当初は表紙を描いていました。この頃の麻雀漫画誌としては珍しいことに、単行本になっているものも多く、代表作に「雀鬼伝説」(阿佐田哲也+吉田幸彦+かわぐちかいじ)、「明日はツモろう」(いしかわ賢+村祭まこと)、「牌師」(わだし)などがあります。特に「牌師」は、北野英明作品の中でダントツ面白いので見つけたらマストバイ。あと、中期の表紙のダサさは異常。

麻雀パンチ(芳文社 84年9月〜87年12月?)



隔月刊。詳細は不明。芳文社はこの時期、「特選

麻雀」とあわせて二誌出していたことになりました。

劇画麻雀時代(笠倉出版社 85年4月〜90年11月)



そこそこ続いた雑誌なのですが、国会図書館などに所蔵されてないため不明点多し。竹以外では珍しい長編(単行本全6巻)になる「風牌に訊け」(吉田幸彦+嶺岸信明)や、「麻雀馬鹿物語」(ほんまう)、「ほおずき」(東史朗+嶺岸信明)などが代表作。由起賢二(由起二賢)の読切が載っているのもポイント。作家陣を見る限り質は低くなさそうです。

コミックNew麻雀(秋田書店 85年6月〜86年11月)



隔月刊。70年代前半の麻雀漫画をリードしていた秋田がついに雑誌に参入しましたが、短命でした。その後「劇画ブル」へと名称変更して、ギャングブル漫画総合誌化(87年休刊)。

麻雀ゴラク(日本文芸社 85年8月〜95年2月)



近麻系列以外の雑誌ではかなり内容が充実している印象。来賀友志作品が割と多く連載されており、のちに「漫画ゴラク」で連載されることになる「天牌」につながるとも言えましょう。作品には「ハッカー」、「指ぐれ」(梶川良+ほんまう)、「劫の修羅」(安藤満十のなかみのる)など。なお後期の作品はほとんど単行本化されていません。

麻雀ゲンダイ(日本文芸社 85年9月〜86年10月?)



詳細はほとんど不明。ネット上には筆者のtwitterを除くと1件しか情報がない始末。

劇画麻雀王(辰巳出版 85年9月〜86年12月) 現物をほとんど見たことがないため詳細は不明。石川賢作品がしばしば載っているので、ダイナミックプロのファンとしては押さえておきたいところで



近代麻雀ゴールド(竹書房 85年9月〜06年6月)

す。



当初は近オリの増刊として季刊での発行。87年に独立創刊し、06年3月にギャンブル総合誌の「近代麻雀ギャンブルCOM」へとリニューアル。代表作に「天」(福本伸行)、「ジョーイチ」、「ナイトストーリー」など。創刊当初はそうでもなかったものの、徐々に雀鬼色が強くなり、末期は「鬼ごっこ」「狂い咲き麻雀道!」などといった連載が並ぶ雀鬼会の同人誌みたいな内容でした。11ページも参照。

YOUNG麻雀(壹番館書房 85年10月〜87年5月?)
オール麻雀の姉妹誌であり、隔月刊。途中で連載はそのままに誌名が「増刊オール麻雀」になったようです。



劇画ビッグ麻雀(司書房 85年12月〜88年2月)



70年代に同名の活字麻雀雑誌を出していた司書房が、約10年ぶりに麻雀にカムバック。しかし短命に終わりました。全体にあまり特徴はないです。

漫画雀王(白夜書房 94年3月〜95年7月)



パチンコ漫画の雄、白夜が、名物編集長・末井どんが麻雀を教え込まれたためか麻雀漫画へ参入。が、18号で終了と相成りました。「デカピンでボン!」(山崎一夫・西原理恵子)、「平成ヘタ殺し」あたりが代表作。

ヤング麻雀(ぶんか社 96年5月〜7月)



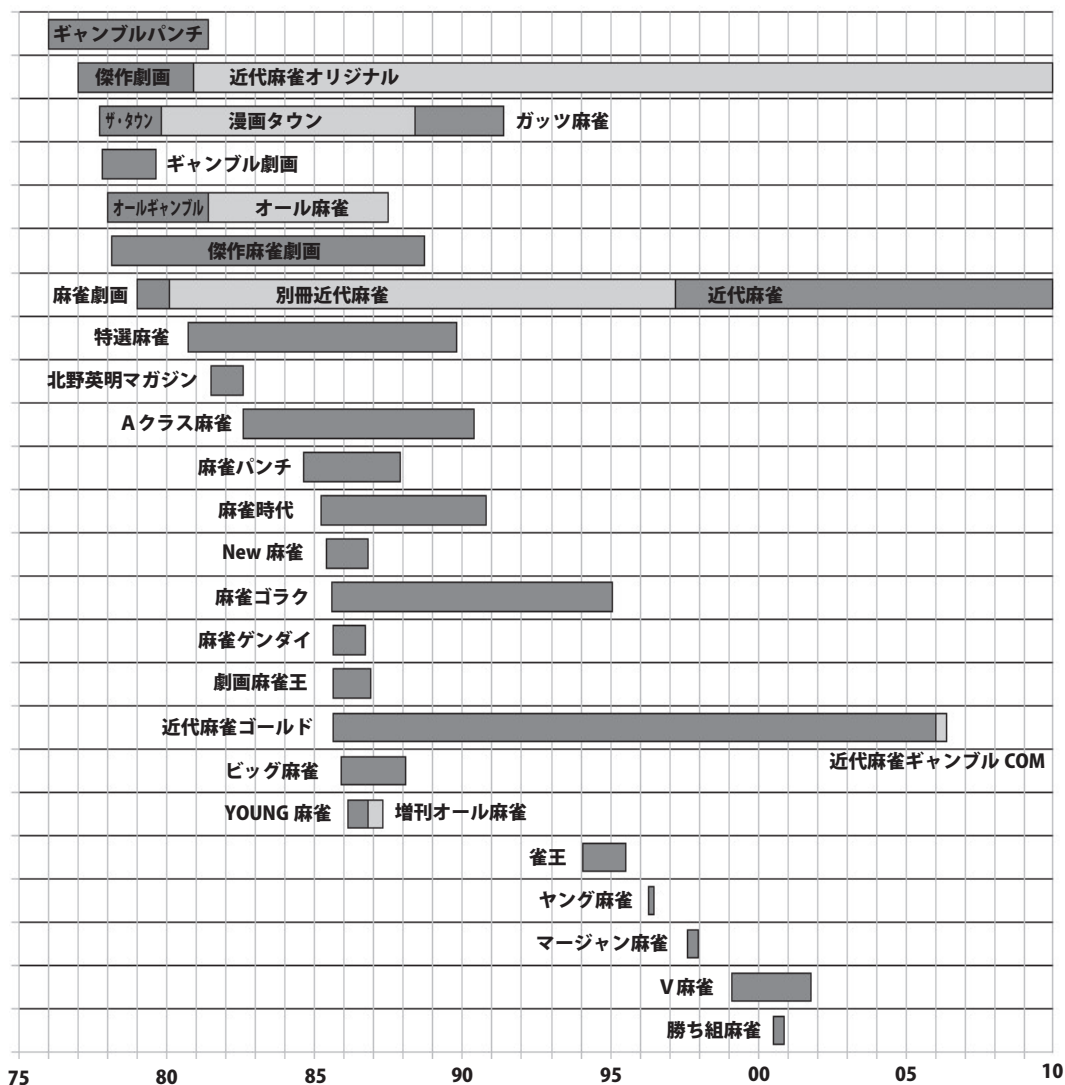
ぶんか社は「麻雀ゲンダイ」の日本文華社の改称。また、先述の「YOUNG麻雀」とは別物。なぜこんな不吉な名前をつけるんだ。創刊号には西原理恵子、原恵一郎、押川雲太朗などメンツが結構揃っていたのですが、あえなく3号で終了。

マジヤン麻雀(メディアボーイ 97年9月〜98年1月)



メディアボーイは三和出版の子会社(エロじやなものを担当)。執筆陣には蛭子能収などがいた模様。

創刊から売上不振が続いたため、起死回生の策として五号目に「一〇〇万円プレゼントクイズ」というものを実施することになったものの、その企画を載せたグラビアページを入稿した後で休刊が急遽決定、仕方ないので奥付に「今号で休刊なので一〇〇万円プレゼントクイズは中止です」と入れた



隔月刊。エログラビアと麻雀漫画を組み合わせたまったくあたらしい雑誌。「カオシツクルーン」などで知られる山本賢治が読切を描いているのが見所でしょうか。

勝ち組麻雀(ワニマガジン 00年8月〜12月)



押川雲太郎「不敗」が代表作。全体的にパツとしない雑誌でしたが、ナイタイはこのころ景気がえらく良かったらしく、90年代以降の麻雀漫画雑誌としてはもともと長持ちしました。今ではナイタイ自体が潰れてしまいましたが……。



ビッグトリー
麻雀(ナイタイ出版 99年3月〜01年11月)

ところ、読者から苦情が殺到(当たり前だ。つーか景品表示法に引っかかるのでは……)、回収、という凄まじい最期を遂げました。

しかし、正気じゃつけられない雑誌名であります。